

# 「やりたいこと」「という論理

——フリーターの語りとその意図せざる帰結——

久木元 真吾

## 1 問いと視角

二〇〇〇年、『労働白書』は多くのページを割いてフリーターに言及した。そこでは、年齢は一五〜三四歳で「①現在就業している者については勤め先における呼称が「アルバイト」又は「パート」である雇用者で、男性については継続就業年数が一〜五年未満の者、女性については未婚で仕事を主にしている者とし、②現在無業の者については家事も通学もしておらず「アルバイト・パート」の仕事希望する者」をフリーターと定義した上で、その数が一九九七年時点で一五二万人に達し、五年前と比べ約一・五倍に増加していると報告されている（労働省、二〇〇〇―一五二）。これ以降、フリーターに対する社会的な関心は一層高まり、フリーター

や若年世代の就業に関する調査・研究が相次いで発表されている。

例えば、東京都立労働研究所（二〇〇〇）の調査は、フリーターの実態の把握が最大の目的であった。また、一九九九年のヒアリング調査に始まる日本労働研究機構の一連のフリーター調査は、高校卒業後にフリーターになる過程の検討や、フリーターと非フリーターの比較分析など、若年非正規雇用者の増加のメカニズムを考察している。さらに、耳塚ら（耳塚編、二〇〇〇。矢島他編、二〇〇二）は、高卒無業者の産出への関心から、進路指導の変容・家庭環境などとの関連に注目し、無業者の漸増に関して高校生や教員に調査を実施している。また山田（二〇〇二、二〇〇二）は、フリーターを「夢見る使い捨て労働者」と呼び、若者がつきたいと思う職と現実的に就業できる可能性のある職の間の落差の拡大が、フリー

ター増加の背景にあるという。玄田(二〇〇一)は、フリーターにも言及しつつ若年層の労働を論じ、中高年の雇用機会が維持されると指摘している。このような多様な就業機会が奪われていると指摘している。このような多様な研究成果を一括して論じることは難しいが、その多くに共有されていたのは、フリーターの増加を若者の「意識」の变化——例えば、仕事を続けることへのこだわりが希薄になった、など——にすべて還元することへの警戒であった。そうではなく、若年労働市場の構造変化など、様々なレベルでの構造的な要因を重視する問題意識があったと考えられる。

本稿は、「意識」に還元することへの警戒を共有しつつ、以上の研究ではとらえきれなかった面、すなわち語られている言説の展開と帰結に注目する観点から、フリーターについて考察することにした。それは一体、どのような試みなのか。以下、対象とするデータについてふれながら、説明していく。

ここで扱うのは、一九九九年に実施された、日本労働研究機構によるフリーター調査の最初の成果である。九七人のフリーターへのヒアリング調査である(日本労働研究機構、二〇〇〇b)。計量的な分析によるものが中心の近年の研究成果の中で、これは現時点でもユニークな成果であるといえる。この調査ではフリーターになった経緯や生活実態などについて詳細な聞き取りを行い、モラトリアム型・夢追求型・やむ

親や正社員観、フリーターでいる理由などの諸点について個別的に検討を加えて集約することが中心であって、彼ら/彼らの語りの言説としての側面に目を払うものではない。

本稿がめざすのは、フリーターの語りを検討して言説の効果をとり出すことである。具体的には、フリーターの語りに頻出する「やりたいこと」という言葉に注目し、その論理を明らかにしつつ、その意図せざる帰結を語られた論理の自己展開の過程として記述し、なぜそのような論理が語られることになるのかを論じる。言説の論理、およびその自己展開による意図せざる帰結に注目するのは、①当事者の語りというデータから論理という形で客観性をもつものを取り出し、②「意図せざる」展開を描くことで単純な「意識」への還元に限らない形で論じるという二つの考えによる。このようなアプローチによって、構造的な要因への注目はみえてこない。言葉の問題としての側面を浮かび上がらせることがねらいである。対象とするデータは公表されているもので、ここではそれを上述した視点から再分析することを試みる。

## 2 「やりたいこと」という論理

まず、フリーターの語りの具体例をみてみよう。<sup>1)</sup>

フリーター「を」続けるのは、私のやりたいことが別

を得ず型などの類型に分けられること、「やりたいこと」にこだわる意識がみられること、キャリア形成や能力開発上の問題があることなどを指摘している。この調査の報告書の巻末には、九七人分のヒアリングの記録が五〇〇頁以上にわたって収録されているが、本稿はこの九七人のフリーターの語りをデータとし、それを意味論的に分析することを試みる。

日本労働研究機構にとって、このヒアリング調査は、本格的な調査の実施に先立ち、仮説を形成するためのものとされており、報告書でも言及されているが(日本労働研究機構、二〇〇〇b:一六)、募集方法などの理由から、集められたケースに厳密に代表性が存在するかは検討の余地が残る。とはいえ、フリーター自身の語りが、統一された調査方法のもとでこれほど多くの分量で得られているものは例がなく、特に、実際にフリーターをしている当事者の意味世界を探るとき、このデータは多大な可能性を秘めた貴重なものだといえる。

また、フリーター自身の語りなどの質的なデータから、彼ら/彼女らの就業をめぐる意味世界を再構成する試み自体も、今なお十分になされていないわけではない。下村(二〇〇〇、二〇〇二)は、まさにこのヒアリング調査のデータを用いてそうした考察を試みた数少ない例であるが、その分析は、本稿でも焦点となる「やりたいこと」という語彙に着目しているものの、フリーターのメリットやデメリット、フリーター

にあるからというのと、正社員になってやりたいという仕事が見つかっていないからというのがあります。(二七歳女、三九四―五)

仕事は、もし自分の興味あることで仕事が見つかれば働きたいと思いますが、……見つからなければ、ずっとフリーターということもあるし、無理にやりたくないことで就職しようとは思っていません。(二〇歳女、一九七)

決して働かないつもりがないわけじゃないんですけど、僕はこういうことをやってみたいんですけど、その方ができないような状況だから。たぶん就職すれば、その会社で自分がやれるところまでやるつもりでいるんですけど、もう、そう思える仕事を自分で見つけられない。ほんとにやりたいことがわからない。(二六歳男、二七九―八〇)

好きなことをやってみたいと思いますね。いいところが見つかって、そこがもしも社員になってと言われたら、……たぶんそのときは社員になると思うんですけど。今は自分が、これはいい仕事だ、自分に合うと思える仕事が、会社の雰囲気も全て含めて思えなきゃ、やっぱりアルバイトがいいみたいな感じです。(二三歳女、三〇七―一八)

……あんまり好きじゃない仕事を何となくやるというよりは、例えばアルバイトでも、……正社員じゃなくても、自分の好きなことをやっているほうが自分の性格に合っているというふうに思ったんですね。(二三歳女、五〇―二)

やりたいことをやる——今回のデータの中で、頻繁に用いられるのがこの表現である。下村(二〇〇〇・七九)によれば、全体の九七名のうちの四二名(四三・三%)が何らかの形で「やりたいこと」という表現に言及しており、フリーターが自らを語る上で重要なキーワードとなっている。

この「やりたいこと」という表現は、「やりたいこと」に対するいくつかの特徴的な想定を含んで成り立っている。では、その特徴的な想定とは何か。ここではまず、語りの具体例を検討しつつ、三つの点に整理して抽出する。

第一点は、その仕事が自分の「やりたいこと」ならば、途中でやめてしまうこともなく続けることができる、ということである。まず語りの例を引用しよう。

やっぱやりたいくない仕事って、続けられないと思うんですよ。……いずれやめるといふ感覚で就職はやっぱりしたくないんで、だったらフリーターで……。 (二一歳女、四三〇)

私自身がやりたいことがないのに無理やり「親が」やらせても、結局続かないのは見えていっているというので。 (二二歳女、四九三)

仕事にしる何にしろ、すごく大事なことというのは、楽しむということだと思っんですよ。楽しいからこそ長く

いいというものであり、これが二つ目の特徴的な点である。以下のいくつかの例から、その点は浮かび上がってくる。

目的もなしにやっているフリーターっていると思いますけど、それも一つのあり方だと思いますね。フリーターをやりながら自分のやりたいことを見つけた準備期間というふうにもとらえられると思います。 (二四歳男、一三七)

フリーターって言われてても、たぶんちゃんとした目的があつてやっていると思うんで、自分はそんな偏見的なイメージはないです。目的がなくても、……やっているうちに目的とかでてくるじゃないですか。そこから頑張れば良いんじゃないですかね。 (二〇歳男、五二八)

自分の好きなふうに生きたい。好きなふうについていうか、まだつかまらないからかもしれない、自分のやりたいことが。つかまったら多分一生懸命やるけど、何やりたいかわからないので、フリーターでいるんだと思います。 (二四歳女、二四七)

今、自分が何をしたいかわからないので、下手に無理やり決めちゃうのも無理があると思うんで、いろいろと考えて、就職するかもしれないですし、まだしばらくさういうちゃんとした就職とかはできなさうだと思っんですけど。 (一八歳女、一七三)

続けていけるんだらうし……。 (一九歳男、四七二)

自分が好きなことを見つけて仕事に没頭してたいんです。 (二三歳女、四四二)

好きな仕事だったら夜勤でも大丈夫だと思っんです。 (二四歳女、五八二)

自分の好きなことで苦労するのは、別にどうってことないですから。 (二六歳女、三二三)

もしもその仕事「やりたいこと」でなければ、たとえやっても長く続けられない／続かないはずであり、逆に「やりたいこと」ならつらくても必ず続けられるはず、ということが、「やりたいこと」をやるという言葉の前提にある。「やりたいこと」なら当然やっついて楽しいはずなので、拘束時間の長さや給料の安さ、不安定さなどの悪条件があつても、それらを上回る楽しさや喜びが得られるはずであり、続けることもできるといふわけである。それは同時に、「やりたいこと」と無縁なものなら続けられないということが、自明視されていることを表している。自分の意志で続けないというよりは、「やりたいこと」でなければそもそも自分自身にスイッチが入らない、と言っかのようであることが注目される。

しかしこれだけが特徴なら、フリーターが語る論理は決して新しくないだろう。仮に新しさがあるとすれば、さらに加わる次の点、すなわち「やりたいこと」は今わからなくても

「歌手になる」「俳優をめざす」などの具体的な目標がある場合に、正社員としての就職よりも「やりたいこと」の追求を選ぶのであれば、それは決して新しい事象ではないだろう。しかし、ここでの事例は、いずれも「やりたいこと」が具体的に定まっているわけではない。「やりたいこと」がまだ明確ではないにもかかわらず、「やりたいこと」が優先されている。そこにあるのは、時間をかけて「やりたいこと」を探すことは、当然認められるべきプロセスであるという理解である。

つまり、「やりたいこと」を探すことは、学校卒業後すぐに就職しない「理由」、フリーターをする「目的」として十分に通用するものだともみなされている。「やりたいこと」へのこだわりがあつても、その「やりたいこと」が現時点で具体的にであるとは限らない。「やりたいこと」を探すこと自体にも、就職すること以上の重要な意味があるとされるのである。

第三点は、「やりたいこと」は実在するといふものである。これについても語りの例をまず挙げよう。

今は二三なので二六とかそれぐらいまでにはちゃんと考えがまとまって、将来どうしたいかとかちゃんと考えられるようになっていたいと思っんです。 (二三歳女、四四二)

やっぱ、自分が年をとっついて、またやりたいこと

が見つかるかもしれないですか。私は、人に流されるんじゃないで、自分のやりたいことをそのままやっていきたいんで……。あんまり先のことには、私は考えないんですよ。……今一番やりたいことをやれば良いという感じですよ。(二一歳女、一九一三)

……自分がやりたいって思ったことなら、何でもできるな、これから探してとどんどんやっていけるなって思ってたので、そのときに「それをやれば良い」っていうふうに考えていたので。特に、こう、焦って探すようなことはなかったですね、やりたいことを。(二二歳女、三六四)

たとえまだ自分の「やりたいこと」がはっきりしていても、やがてそれを見つけることができるということは基本的に想定され続ける。「やりたいこと」はどこかに実在しているはずであって、それが明確な形で発見されることなく終わる可能性は、現実的な形では考慮されないものである。そして、ここで「やりたいこと」は、他者とのコミュニケーションの中で徐々に形成されていくというよりも、既にできあがったものとして自分の内部に存在しているものと想定されている。だからこそ、「やりたいこと」は「つくられていく」ものではなく「探す」「見つける」と表現されるのである。したがって、「やりたいこと」を「探す」といつても、やがては「やりたいこと」と出会うことになるはずとされている。

もむしる正社員の方こそが自明でないあり方で、説明を要するものとされる。

### 3 良いフリーター／悪いフリーター

以上のような構造をもつ「やりたいこと」という論理は、論理であるがゆえに、まさに論理的に自ら展開して、いくつかの帰結を導くことになる。

「やりたいこと」を優先するという場合、即座にフリーターでなければならぬとされるわけではない。あくまでもメルクマールは「やりたいこと」との関係であり、労働形態はマインナーな問題にすぎないので、正社員を否定しフリーターを肯定するといった評価は直接帰結されないのである。

そのため、「やりたいこと」とその仕事とがフィットするのであれば、正社員かフリーターかという違いは重要ではない。現在フリーターであってもそれは必然的なことではなく、「やりたい」仕事ならば正社員になるのも構わないということになる。正社員になる可能性は全否定されていないのである。

自分のやりたいことを探して、行きついたらとところに正社員があれば、もちろんなりたいたいと思うし、仕事選びの前提に正社員というものがあるっていうことは全くないです。何よりも、自分のやりたいこと。(二〇歳女、二二一三)

るため、現時点でそれがまだ見つからないとしても、それだけで即座に問題となることはない。そしてこの点ゆえに、「やりたいこと」を探すことや、それが見つかるのを待つこと、不確かな「やりたいこと」の発見を見越してフリーターでいることも許容されていくことになる。

以上のように、①続けられる、②今わからなくてもいい、③きつと見つかる、という三点の特徴が「やりたいこと」をめぐる語りから抽出できる。そして、この三つが前提となつて、論理的な結論として導かれているのが、本人が自分の「やりたいこと」をやるのが最も良い選択だということである。重要なのはあくまでも「やりたいこと」をやることであつて、それを優先した結果、正社員としてではなくフリーターとして働くことになつても、むしろ望ましい選択であるとされる。「やりたいこと」が仕事と一致するのであればそれに越したことはないが、一致しない(または「やりたいこと」がはっきりしない)のなら、「とりあえず」就職するよりも、「やりたいこと」(と一致する仕事)へのチャレンジやその探索を優先する方が望ましいというわけである。

この一連の論理の内部では、自分の「やりたいこと」に忠実であることこそが就業をめぐる選択の際に説得的な根拠になるとされる。そのため、「やりたいこと」と無関係な仕事に正社員として就業することは、逆に理由を欠いたものとみなされる。つまり、この論理構造の中では、フリーターより

自分のやりたいことが生かせる仕事場とか職業でしたら、すぐ就職したいんですよ。(二二歳女、四三三五)

ほんとうに自分のやりたいことだったなら、正社員でもきつと自分でも嫌じゃないと思うんですよ。(一九歳女、一八三二)

逆にいえば、「やりたいこと」との関わりだけが、正社員であることを許容する理由たりうることになる。つまり、「やりたいこと」と無縁の仕事なら、とても正社員としてそれをするとはできないと判断される。そして通常、正社員としての勤務と「やりたいこと」は一致しないため、結果的に正社員という働き方への否定的な評価が帰結されることになる。

「正社員という働き方は」やりたい仕事じゃないと、無駄に歳を取る気がする。(二二歳女、二二二六)

正社員の方は、仕事がやはり夢なんですかね。でなきゃやっていけないんじゃないですかね。……何で彼らが正社員をやっているのか、いまイチわからないという感じなんです。(二三歳女、二四二二)

一見すると、正社員というだけで否定されているようにみえるが、あくまでも「やりたいこと」との関わりを経由する

形で評価がなされていることに注意する必要がある。後者の言葉は、仕事「夢」＝「やりたいこと」と一致することこそが、正社員としての就業にとって必要な条件であることを具体的に示している。フリーターよりも正社員でいることが説明を要するというのは、このようなことをさす。

しかし、だからといってフリーターならば無条件に肯定されるわけでもない。「やりたいこと」があり、それをめざしていることはフリーターであることを正当化するが、そうでない場合は、フリーターであっても否定的に評価されることになる。特に、前節でふれた「やりたいこと」は今わからなくてもよい」という前提があるために、現実には二つのタイプ、すなわち「やりたいことがある／を探している」者と「本当はやりたいことがあるわけでもない」者が混在しており、しかも両者を外から区別することは難しくなっている。そのために一層、「やりたいこと」へのこだわりの有無がフリーターに対する価値基準として強く機能してしまう。その結果として導かれるのが、フリーター内部の分割すなわち「良いフリーター」と悪いフリーターとの区別」である（下村、二〇〇〇・七七一七九）。

二通りあると思うんですよ、フリーターでも。やることなくてやつてる子と、やりたいことがあつてバイトしている、何かのためにバイト、フリーターじゃなきゃいけない人と、やることが何も見つからなくてフリーターでしょ

以上のように、フリーターが語る「やりたいこと」という論理は、「やりたいこと」へのこだわりの有無をメルクマーとした評価基準を重視するために、正社員かフリーターかという違いを直接には問題にせず、そこにフリーターであることの正当化の余地が確保される。しかしまさにそのことによつて、「やりたいこと」へのこだわりを持たないフリーターに対しては、フリーター自身が否定的な評価を下すことになつてしまう。これらは、「やりたいこと」という語彙を用いて語つたことの表裏一体の論理的な帰結なのである。

#### 4 「やりたいこと」といふ論理の意図せざる帰結

「やりたいこと」という論理がもたらす帰結は、これだけにとどまらない。「良い／悪いフリーターとの区別」は、フリーター自身にとつて自覚されているものであつたが、「やりたいこと」の論理的な帰結は他にもあるのではないか。つまり、「やりたいこと」をやるとした語の地点からは必ずしもどちらえられていなかった「意図せざる帰結」も、「やりたいこと」という論理から導かれてしまつていのではないだろうか。ここでは、その意図せざる帰結を三つに整理して検討する。

一つは「やりたいこと」に対する要求基準の厳しさゆえにかえつて「やりたいこと」が見つかりにくくなるという点で

うがなくやつている人と。（二九歳男、三三四）  
悪いフリーターっていうのは、……今のことしか考えてないっていう。……良いフリーターは……現実的に自分のやりたいことを計画している人。（二〇歳女、二二四）

このように、「やりたいこと」へのこだわりの有無をメルクマーとして、フリーターに対して「良い／悪い」という評価がなされる。こうした二種類のフリーターとの区別の強調は、フリーターを一括して否定的にみる見解への反論に用いられることもある。つまり、この線引きによつて、否定的にみられがちなフリーターから、肯定できる部分を取り出そうとしているわけである。しかし、そうであるがゆえに、この線引きはフリーターを全体として肯定することにはならない。むしろ、「良い／悪い」という評価をもちこむことになつたために、フリーターの一部に対しては、「フリーター」でしかも「悪い」という、二重に否定的な評価をフリーター自身が下すことになつてしまう。その結果、「悪いフリーター」に対してフリーター自身が注ぐまなざしは、時に非常に厳しいものとなる。

私の回りのアルバイトの方は何か目的を持って働いている子が多いです。もし、目的がないとすれば最低だと思えます。（二四歳女、四四六）

ある。「自分が好きなことを見つけて仕事に没頭していたい」  
（二三歳女、四四二）や「好きな仕事だったら夜勤でも大丈夫」  
（二四歳女、五八二）といった例にみられるように、フリーターが語る「やりたいこと」は、たとえ労働時間や賃金などの条件が悪くても、夢中になつて没頭して取り組めるほどのものとして、あらかじめ定義されている。しかし、それほどの高い条件を満たす「やりたいこと」が、容易に見つかることは考えにくい。明確な形で「やりたいこと」を発見・同定することは、自己探求の深さの度合いとは無関係に、そもそも単純に条件が厳しいために難しいことなのである。実際、フリーターの語りからも、自分の「やりたいこと」がなかなか定まらないことへの当惑や不安をみるることができる。

……やりたいものが、以前は歌だけというのもあつたんですけど、最近、何かもつと自分を表現するものとして、ほかのものもあるんじゃないかなと思ひ始めているので、結構、これというものがなくてちょっと不安です。（二〇歳女、三四九―五〇）

二点目は、仮に「やりたいこと」が具体的にあるとしても、現実にはそれを続けていくことが難しくなつた場合に発生する困難である。既に見たように、「やりたいこと」をめぐつては、その有無がフリーターに対する価値基準として機能し、「良

い／悪い」などの強い評価意識を生じさせやすい。そのため、さまざまな事情で「やりたいこと」をめざすことを自らやめざるをえない場合、自分自身に対して否定的な評価を下すことになりかねない。「悪いフリーター」に対して注がれた厳しい視線が、自分自身にも注がれることになりうるために、現実には困難にぶつかっても、なかなか「やりたいこと」からリタイアしづらくなってしまふと考えられないだろうか。

また、「やりたいこと」の有無がフリーターを評価する価値基準となることによつて、「やりたいこと」をめざしているということがそのまま本人の価値を示すと考えられるようになる。その結果、「やりたいこと」は単なる目標という以上、フリーターであることの存在証明として機能するようになる。「やりたいこと」をめざすことが、就業をめぐる選択にとどまらず、自分自身の価値を証明するための行為にまでなつてしまうので、「やりたいこと」からリタイアすることは存在証明を失うことにもなりかねない。実際、フリーターよりも正社員で働く方が望ましいという視線が彼ら／彼女らに注がれているのであれば、その中でフリーターであるためには、存在証明は不可欠なものはずである。こうした面から、「やりたいこと」からのリタイアは一層難しくなつてしまふ。

三点目は、「やりたいこと」を、最初からできあがつたものとして自分の内部に存在しているはずと設定したことの帰部分もあります。……逆に自分が何したらいいのかなというときにあんまり相談できないとか、相談しても自分が好きなようにやれつていうことしか返つてこないの、どうしたらいいんだろつて。(一三歳男、五三四)

以上のように、「やりたいこと」という論理は、その延長線上に意図せざる帰結という形で、それを語る者にとつていくつかの困難を生み出す形になつていく。一見すると、「やりたいこと」をやるとするのは事後的な印象を与えうるものであり、実際フリーターに対してそうしたイメージが語られることは今なお少なくない。しかし、ここでみたように、「やりたいこと」をやろうとすることが、到達しにくく、妥協しにくく、にもかかわらず放任されると、実はそれほど楽な道とはいえない。しかもその厳しさは、労働条件などの実際の社会的な状況が恵まれていないために厳しいという以前に、そもそもその論理自体に厳しさが内在しているのである。ここにみられるのは、「やりたいこと」の重視が「やりたいこと」の困難に至るといふ皮肉な論理展開であり、フリーター自身が自らの言葉に足をとられそうになつてくる姿である。

しかも、この論理的な困難は、「やりたいこと」そのものの不在や到達不可能性を含意するものではない。そのため、意図せざる帰結をもたらした当初の三つの前提は、この困難

結である。求めるものを「やりたいこと」と表現することは、それを本人の内部のみ存在し、本人だけが発見しうるものとみなすことでもある。その結果、「やりたいこと」が何であるかという「正解」は、本人しか知りえないものとなり、本人以外の人が介入することは困難にならざるをえない。「やりたいこと」を探すこと・めざすことは、個人の内部だけで完結するものとなつてしまひ、他者との交流の契機はむしろ希薄になる。さらには、「やりたいこと」をやると言つと、他の者は介入できないため、その内容や実態によらず、結果的に曖昧に受け入れられることになつてしまふ。つまり、「やりたいこと」をめざすことは誰からも止められなくなるのである。

なお、フリーターとしてであつても、「やりたいこと」をやろうとすること自体が、近年では否定されずに許容されるようになりつつあるという指摘もなされている。しかし、たとえ「やりたいこと」を探すことが周囲の人々から消極的に容認されていたとしても、そのことによつて、かえつて周囲から放任されてしまひ、結果的に自らが進む方向を見出しづらくなるフリーターも生まれている。

うちの両親は自分で考えてやれつていう、うるさいことは全く言わない人です。全然押しつけないんで、かえつてそれがやっぱり、どうしたらいいのか自分で悩む種になるによつても否定されることはない。むしろ、それによつてかえつて「やりたいこと」の価値が高まり、「やりたいこと」への関心(三つの前提)を強化することにつながっている可能性さえある。ここには、意図せざる帰結がもたらされるにもかかわらず、当初の三つの前提が一層強固に信じられるという循環的継続があるのではないだろうか。

## 5 なぜ「やりたいこと」なのか

「やりたいこと」という論理がもたらす帰結は、上述したものとどまらず、さらに広い視点から考えることもできる。そのような帰結の一つとして指摘できるのは、「やりたいこと」という言葉を語ることに、就業選択の問題が個人の内面にのみ関わるものとして描かれる結果、各人が現実利用できる資源に差があつても、純粋に個人の問題として事態がとらえられ、さまざまな条件の格差を追認することになつてしまふ可能性があるという点である(新谷、二〇〇一、一八五)。事実、耳塚編(二〇〇〇)は、フリーターが相対的に低い階層から多く輩出されていることを明らかにしており、進学を許さない家計状況ゆえに、就職できない場合はフリーターを選ばざるを得ないケースが少なくないと指摘している。

この格差の(再)生産という論点は重要なものであるが、

既にたびたび指摘されていることもあり、ここではもう少し違う角度から検討することにしよう。ここで注目するのは、なぜ「やりたいこと」という言葉が語られるのか(数多くの言葉がある中で、なぜその言葉になるのか)という点である。それに対して、フリーターたちがまさに「やりたいこと」をやりたいと思っているからだとする見方もありうるだろうが、それでは再び彼ら/彼女らの「意識」に原因を求める論法に戻ることになる。そうではない、別の可能性はないだろうか。

フリーターが「やりたいこと」に言及することについて、乾(二〇〇二)は、若者に対して「やりたいことをもっていないといけない」という社会的な圧力がある可能性を指摘している。しかし、仮に乾の指摘通りならば、その圧力はむしろ「やりたいことを明確にせよ」という形になり、「やりたいこと」を探索中という曖昧な状態は許容されなくなると考えられる。実際には、「やりたいこと」がまだ明確になっていないケースが含まれる点こそがフリーターの語りの特徴である以上、そこまでは言えないのではないだろうか。

改めて「やりたいこと」という論理をみると、実は、単に「やりたいこと」が優先できればいいわけではないことがわかる。上で引いた「やりたいことでない」と続かない「やりたいことを仕事にして没頭したい」などの言葉は、「仕事はすぐやめずに続けるべき」「仕事は没頭するくらいに取り組むべき」

だとすれば、フリーターたちにとっては、「現実的につける可能性のある仕事」「没頭」を強いるような仕事以外にない状況下で、それでもすぐにやめずに続けることが可能な仕事は何か」という問いこそがまず先行している。そして、その問いへの答えとなっているのが「やりたいこと」なのではないだろうか。なぜなら、「やりたいこと」なら困難な条件下でも定義上やめずに続けることができるはずだからである。

一見すると、「厳しい条件でもやめずに没頭できる」という「やりたいこと」に対する要求水準の高さは、単なる「やりたいこと」へのこだわりの強さの表れにみえるかもしれない。しかし、それはむしろ、厳しい制約の問いが先行しているからこそ生じたものではないだろうか。つまり、「やりたいこと」という言葉は、「やりたいこと」しか回答たりえないような、厳しい制約の問いから導き出されているのである。そして、フリーターであることよりもあえて正社員になることの方が、自明ではなく理由が必要とされると上述したが、正社員になった場合に経験することになる困難な状況が先取りされて折込済みであるからこそ、正社員になる選択の方が説明を要するものとされるのだと考えられる。

また、「やりたいこと」が具体的に定まっていなくてもかわらず「やりたいこと」が重視されるという順序の逆転がみられることも、以上から説明できる。つまり、制約の強い

という価値が背後にあることを示唆している。こうした仕事に関する継続や取り組みの熱心さの重視は、むしろ従来望ましいとされてきた価値と適合的なものだといえる。

玄田(二〇〇一、一八九、一三四—一三七)によれば、年間二百日以上就業し、一週間に六〇時間以上働いている三五歳未満の若者は約一九〇万人にのぼるといい、男性三〇代および女性二〇代では、一九八七年から九二年にかけて低下した長時間雇用者の比率が、九七年のデータでは再び元の水準に戻ろうとしているという。玄田は、こうした長時間労働の若年層の増加の背景として、不況によって業務ノルマが高まったことや、採用抑制でかえって若年雇用者の仕事量が増加したことなどがあると論じている。フリーターたちが正社員として勤務したとしても、長時間労働から逃れることは現状ではおそらく難しいだろう。そして、フリーターが語る言葉に「すぐやめずに続けるべき」「没頭すべき」という価値がうかがわれるのが、そうした状況下においてであることに注意しなければならぬ。このことは一体、何を意味しているのだろうか。

おそらくフリーターたちは、たとえ正社員になったとしても、自分たちが実際に就くことができる仕事が長時間労働を伴うもので、好むと好まざるに関わらず没頭する他ないものであることを先取りしている。つまり、現実の困難な状況は、彼ら/彼女らにとって折込済みなのではないだろうか。

問いが先取りされているからこそ、具体的に同定できるかどうか以前に、仕事として選ぶのは没頭できるほどのこと「やりたいこと」でなければならぬ。だからこそまず「やりたいこと」であり、後からそれが何かを探っていくことになる。曖昧な「やりたいこと」への関心は、先行する問いの制約の強さにより、最初から答えが見つけにくくなっていることゆえの事態であり、問いの形式の効果なのである。

## 6 おわりに

「やりたいこと」という論理を語るフリーターたちは、二つの困難の中にある。困難の一つは、論理が自己展開することによって言葉が空転し始めるという意図せざる帰結である。そしてもう一つは、就業に際して、「やりたいこと」しか回答たりえないような、制約の厳しい問いを前提せざるをえないという事態である。しかし、この「言葉の空転と問いの制約」という二つの困難は、フリーターたちの「意識」から生じるとはいえない。また、労働をめぐる現在の日本社会の構造的なあり方は重要な要素であるとしても、それが何らかの形で改善されれば、すべての困難が消滅するわけでもないだろう。だとすれば、ここで示されているのは何なのだろうか。

その多用・頻出という面だけにとどまらない。仕事をめぐり「やりたいこと」という論理ばかりが語られているという、語りの定型性という面にも注目すべきなのではないだろうか。フリーターたちの語りに見出されるべきなのは、「やりたいこと」という語彙の頻出<sup>11</sup>過剰より、むしろ「仕事」や「働く」ということをめぐる語彙のヴァリエーションの過小である。つまりここで示されているのは、「やりたいこと」への関心という以上に、「仕事」や「働く」ということがいかに限られた定型的な言葉でしか語られていないかということである<sup>12</sup>。

フリーターが増えたのはフリーターという言葉ができたからだという指摘がある(村上編、二〇〇二)。つまり、フリーターという言葉の出現によって、いわば帰属する場所ができたためにフリーターになる者も増えたというわけである。同様に、「やりたいこと」という論理が発見されたことによって、「やりたいこと」という言葉で自らを説明する者も増えたのかもしれない。山田(二〇〇二)は、フリーターを擁護する言説も非難する言説も、目的意識をもっているフリーターは良いが、何となくフリーターをやっている場合は悪いという結論に落ち着くことが多いと指摘している。このことは、上述した「良い/悪いフリーターの区別」と同型の、「目的」「やりたいこと」を重視する論理がフリーター以外の人たちにも共有されていることを表している。だとすれば、「やりたい

こと」を重視するフリーターたちは、特殊な存在というよりもフリーター以外の人びとと地続きの存在なのだといえる。「やりたいこと」という論理の頻出と流通が示しているのは、現在の日本社会で、「仕事」や「働く」ということをめぐり、言葉の問題が無視できない重要性をもっているということ、新たな言葉が求められているということである。そしてそのことは、決してフリーターに限らず、「やりたいこと」という語彙を用いる多くの人々が直面している問題なのである。

注①二〇〇三年版の『国民生活白書』では、フリーターをより広

く「一五―三四歳の若年(ただし、学生と主婦を除く)のうち、パート・アルバイト(派遣等を含む)及び働く意志のある無職の人」と定義した上で、二〇〇一年にはその数が四一七万人に達しているとされている(内閣府、二〇〇三、一一四)。

②この調査で対象となったのは、専門学校を通じた紹介、およびアルバイト情報誌等で募集された、年齢三〇歳未満の自称「フリーター」で、学生でも主婦でもない者である(日本労働研究機構、二〇〇〇b、二〇)。九七人のうち、男性は三四人、女性は六三人で、平均年齢は二二・七五歳である。対象者の詳細については、日本労働研究機構(二〇〇〇b、三五一―四六六)を参照。

③上述したように、フリーターという現象を「意識」の変化に還元してしまうことが警戒されたため、結果的に「見すると「意識」に還元する論法につながらやすいようにみえる(当

事者の語りなどの)質的なデータの分析が相対的に不活発になつてしまった可能性もある。質的なデータを扱った数少ない例に、新谷(二〇〇二)がある。

④ここでいう「論理」は、フリーターによって見出されている論理的連関と、そのフリーターの視点を超えて展開していく論理的連関の両方を含んだものを想定している。

⑤このような戦略は、言説分析というアプローチに由来している。ここで言説分析とは、いわゆる内容分析のように、言説の外的要因によって最終的な説明を与えるのではなく、言説が語られること自体の効果を記述する試みである(遠藤、二〇〇〇。佐藤、一九九八、二〇二)。

⑥なお、筆者はこの調査の実施には直接関わっていない。この試みは公開されている質的データの再分析であり、その意味で二次分析(佐藤他編、二〇〇〇)の一種と位置づけられるものである。こうした分析には、データが公表されているためにその分析が反証可能性に開かれているという利点があるが、データの間接性ゆえに、データが公表された形になるまでに調査者が施した加工(に伴うバイアス発生の可能性)を十分に評価できないなどのデメリットもある。言説の論理とその自己展開への注目は、これらの点をふまえた上で選択されたアプローチである。

⑦以下、日本労働研究機構(二〇〇〇b)に収録されているヒアリング結果からフリーターの語りを引用する場合は、(語りの年齢と性別、日本労働研究機構(二〇〇〇b)での掲載ページ数)という形で表記する。口語表現がそのまま語りのデータに再現されているため、適宜助詞の欠落などを補い、

その場合は「」で囲んだ。省略は…で示した。

⑧「やりたいこと」に近い表現である「好きなこと」なども含めて筆者が暫定的に集計すると、五三名(五四・六%)となり、そのうち男性は一〇名、女性は四三名であった。なおジェンダーとの関連については注②を参照。

⑨実際には、「やりたいことなら続けられる」と「やりたくないことなら続けられない」は論理的には同値ではないが、ここで検討している当事者の語りのレベルでは、しばしば両者は混同されている。

⑩よく知られた「モラトリアム人間」(小此木、一九七八)と「やりたいこと」を探すフリーターを比べると、前者は成熟や自立などの万人に共通なゴールを想定しており、それまでの期間はあくまでも猶予でしかないのに対して、後者の場合は「やりたいこと」というゴールの内実は個別的であり、また猶予期間ではなく積極的な模索の期間だと意味づけられている。しかしそれゆえに、後者については以降で述べる意図せざる帰結を伴うことになる。

⑪このことは、「フリーター/プータロー」の区別を強調する次の例でも同じである。「フリーターは悪いことじゃないと思いますよ。自分の夢に向かってやっていると何なりすれば……ただ、時給が安い、仕事が見つからない方が結局プータローと言われるので、時給が安くても頑張っている人がフリーターだと思えます。私は、プータローとフリーターは全然違うでしょうね」(二八歳女、五一九)。

⑫諸田(二〇〇〇)は、高卒無業者を輩出している東京都の高校の進路指導担当教員への調査から、「目標があれば、ある



いは自分のやりたいことをみつ付けてくれれば構わないという「希望・自己選択重視型」の論理」や、「生徒の希望だからという理由で教員の側から何も言えないという「非進路強制型」の論理」の存在を指摘している。つまり、「やりたいこと」が許容されるといっても、その内実は本人の意思の尊重というよりも、むしろ本人の意思に反する選択を強制することへの踏踏ゆえに、結果的に認められているにすぎないという面もある。

⑧フリーターとジェンダーの関連については稿を改めて論じた。なお、フリーターの過半数を女性が占めていることは既に指摘されている(小杉、二〇〇二)。ここで対象としているデータでも、「やりたいこと」等の表現を何らかの形で用いているケースは、男性が三四人中一人(三三・四%)に対して、女性は六三人中四二人(六六・七%)とかなり高い比率になっている。仮説的に述べるにとどめるが、女性の方が正規雇用の現実的な可能性がより厳しいゆえに、「やりたいこと」という論理がより容易に語られるのかもしれない。なお、フリーターにおけるジェンダーの問題についてのより分析的な議論は、本田(二〇〇二、二〇〇三)を参照。

⑨フリーターたちが「自分はやりたいことをやる、そうでなければ続かない」「やりたいことなら正社員として仕事をしてもいい」と語るとき、そこにみられるのは、「やりたいこと」は仕事と重なるものであるべきだという考えである。つまり、ただ楽しみだけを求めるのではなく、そしてそれを仕事の枠外に求めるのでもなく、楽しみと仕事を(両立ではなく)一致させることを表そうとして「やりたいこと」という論理が

語られている。逆に言えば、「楽しみと仕事の一致」という形で「仕事」や「働く」ことをポジティブに語りうる語彙が、「やりたいこと」に限られてしまっているということでもある。

文獻  
新谷周平、二〇〇二、「ストリートダンスからフリーターへ」『教育社会学研究』七二(一五)一七〇。  
遠藤知巴、二〇〇〇、「言説分析とその困難」『理論と方法』一五(二)一四九一六〇。  
玄田有史、二〇〇一、「仕事のなかの曖昧な不安」中央公論社。  
本田由紀、二〇〇一、「ジェンダーと労働形態」(日本労働研究機構、二〇〇二、一六三―一八五)。  
小杉編、二〇〇二、「ジェンダーという観点から見たフリーター」(小杉編、二〇〇二、一四九―一七四)。  
乾彰夫、二〇〇一、「高卒無業者・フリーターの発生要因と社会的性格」『教育と社会』研究』一一(一)一〇。  
菊谷剛彦、二〇〇一、「階層化日本と教育危機」有信堂。  
小杉礼子、二〇〇一、「増加する若年非正規雇用者の実態とその問題点」『日本労働研究雑誌』四九〇(四四)一五七。

二〇〇三、「フリーターという生き方」勁草書房。  
編、二〇〇二、「自由の代償/フリーター」日本労働研究機構。  
耳塚寛明編、二〇〇〇、「高卒無業者の教育社会学的研究」一九九一―二〇〇〇年度科学研究費補助金研究成果報告書。  
諸田裕子、二〇〇〇、「進路としての無業者」(耳塚編、二〇〇〇、一三三―一三九)。  
村上龍編、二〇〇一、「未来のあるフリーター未来のないフリーター」

ター 日本放送出版協会。

内閣府、二〇〇三、『国民生活白書 平成一五年版』。  
日本労働研究機構、二〇〇〇a、『資料シリーズ』二一 若者の就業行動の変化を考える。日本労働研究機構。

二〇〇〇b、『調査研究報告書』一三六 フリーターの意識と実態。日本労働研究機構。  
二〇〇〇c、『調査研究報告書』一三八 進路決定をめぐる高校生の意識と行動。日本労働研究機構。

二〇〇一、『調査研究報告書』一四六 大都市の若者の就業行動と意識。日本労働研究機構。  
小此木啓吾、一九七八、『モラトリアム人間の時代』中央公論社。  
労働省、二〇〇〇、『労働白書 平成二二年度版』。

佐藤博樹・石田浩・池田謙一編、二〇〇〇、『社会調査の公開データ』東京大学出版会。  
タ 東京大学出版会。

佐藤俊樹、一九九八、『近代を語る視線と文体』高坂健次他編『講座社会学』理論と方法。東京大学出版会、六五―九八。  
二〇〇二、『言説、権力、社会、そして言葉』『年報社会学論集』一五(一五八―一六八)。

下村英雄、二〇〇〇、『フリーターの職業意識』(日本労働研究機構、二〇〇〇b、七〇―八五)。  
二〇〇二、『フリーターの職業意識とその形成過程』(小杉編、二〇〇二、七五―九九)。

東京都立労働研究所、二〇〇〇、『大都市若年アルバイトの就労と意識』東京都立労働研究所。  
矢島正見他編、二〇〇一、『変わる若者と職業世界』学文社。

山田昌弘、二〇〇一、『家族というリスク』勁草書房。

二〇〇二、『フリーターの置かれている現状と将来展望』『労働の科学』五七(二)一五―一八。

(本論文は、二〇〇一年九月八日の第一二回日本家族社会学大会 および二〇〇二年一月一六日の第七五回日本社会学大会での報告を加筆修正したものである。)  
くきもと しんご・財団法人家計経済研究所研究員